

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所二代目理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のこゝとばを掲載します。

お金が入った。しめたものだ、いい気になっていると、つい心がゆるんで、あれも欲しい、これもそろえておこうと、ほんとうはなくてもすむようなものまで買ひこんで、思わぬ出費の結果、かえって赤字になるようなことを、私たちは、しばしば体験するのではあるまいか。赤ん坊が、とても太っている。病気にもかからないというので、親が得意になって、行く先々で人に見せびらかしたり、来客には誇らしげに自慢したりしていると、まもなく下痢をして、すっかりやせてしまふとか、ちよつとしたカゼがもとで、だんだんひ弱になってしまふとかいった事例も、よく聞いた見たりするところである。裁縫をする人が、自分の腕を得意に思い、上辺は知らぬ顔をしていても、心の底では自慢でいっぱいになっている。たまたま大事なお得意さまが来て、りっぱな布をあずかる。さて、仕事にかかってやっていると、ふだんはまったく嫌いなことなのに、どうしたはずみか、裁ち方をまちがえてしまい、取り返しのつかぬ結果になる。このほか、実例は数限りなくある。得意になり、いい気になっておると、思わぬことから失敗する。不幸に陥る。誰でも知っているはずなのに、私たちが、しばしばこうしたことをつくり返すのは、得意になると失敗をするとい

6月のテーマ | 感謝という妙薬

## 得意のときは危機

丸山竹秋



う真相が、ほんとうは、まだよくわかっていないからではなからうか。

これは、単に油断とか不注意とかから失敗するのだというだけではない。およそ、物事は、表といえば裏があり、前といえれば後があるように、一つのものには、必ずその反対があつて、方向をかえれば、すぐ転じやすいようにできているからである。

物事が、うまくいっているときには、つとめて自重し、謙虚にしておらねばならない。そのためには、自分だけの力ではなく、いろいろな意味で、周囲の人々や大自然の力に支えられて、このようにうまくできたのだとの自覚を、新たにしていればよい。子どもが健康であるならば、わが子にそそがれている大自然の恵みを意識する。

自分に特別の才能があるならば、その自分を生んでくれた親（さかのぼっては祖先）を思い、育て、はぐくんでくれた労力を感謝する。

このように他に感謝し、その恩恵を思う気持ちを起こすことは、おのれのつまらぬうぬぼれを取り去る妙薬となる。そこに、自重の念や、謙虚な動作が自然に生じてきて、うまくいっている状態を、その反対の破滅的な方向に向けさせないようにする。とにかく、家庭の内外を問わず、すべて物事が、うまく、りっぱに、みごとにはこんでいると知ったときには、ここが大切なところだと反省しようではないか。得意のときが危機なのである。

『幸福の決め手』より